

# 日本近代史講座… 先の大戦に至った歴史上の転換点を求めて

## 第1回 アジア最初の国民国家誕生… 徳川慶喜の不戦の背景

### はじめに

日本近代史講座の第1回は、静岡に馴染みの深い徳川慶喜です。慶喜が朝廷との戦いから早々はやばやと離脱した事により旧幕府から朝廷へ政権が速やかに移りました。その結果、欧米列強の介入が阻止されて、アジア初の国民国家が誕生しました。慶喜はその功績により従一位・公爵を受爵し、明治時代を超えて大正二年、歴代徳川将軍中最長寿の七七歳で病没しました。ところが数種類の高校・日本史教科書を要約しますと「慶喜の大政奉還後、朝廷は小御所会議で慶喜の辞官納地を決定し、薩長を中心とする倒幕勢力は旧幕府勢力を一掃しようと画策かくさくした。これに反発した旧幕府軍は慶応四年一月鳥羽伏見の戦いで新政府軍に破れ、慶喜は江戸に逃れた。新政府軍は江戸に迫り勝海舟と西郷隆盛の交渉により江戸城を無血開城した」とあり、この記述では慶喜自身の出処進退の経緯が全く不明です。この意味で鳥羽伏見戦争や江戸城の無血開城にまつわる慶喜の発想・行動経過を紹介します。

### 一、旧幕府勢力の巻返し

慶応三年一二月九日朝廷は王政復古の大号令を発した後、小御所会議で『慶喜の辞官・納地』を一旦決定しましたが、後に公議政体派（尾張藩、越前藩、土佐藩、芸州藩）が再び巻き返して、倒幕派の薩摩藩の反対を押切つて寛大な処理案「①慶喜の身分は内大臣を辞し前内大臣さきのうちと称する ②領地没収は撤回し応分の朝廷経費負担 ③慶喜の議定職就任」を決定しました。**1** 徳川慶勝・松平春嶽が早速大坂城に出向いて慶喜を説得した結果、一二月二十八日に慶喜は「辞官は了承し、朝廷経費負担については天下の公論に従って確定するとの御沙汰の儀、謹んで承うけたまわります」との請書うけしょを差し出し、追つて軽装で上京して朝廷の廟議びやうぎに参加しようとなりました。討幕派の西郷隆盛は家康再来と評された慶喜が朝廷の廟議に参加すると朝廷は徳川家に牛耳られると危惧して、薩摩藩士・益満休之助と伊牟田尚平に江戸で騒乱を起させたのでした。その目的は①幕府兵力を江戸に釘付けにして京坂地区に兵力集中を防ぐ②幕府の統治力の弱体化を江戸の民衆に印象づける③旧幕府軍に薩摩討伐の兵を起させる事でした。この薩摩藩主導の無頼漢による江戸市内の乱暴狼藉に激怒した幕府は薩摩屋敷を焼討ちし、その情報を携えて大目付・滝川播磨守具拳ともあきが大坂城に到着すると、城内の旗本や会津・桑名藩士が激怒して討伐を叫んで収拾困難になりました。**2** 「昔夢せきむかい会筆記 徳川慶喜公回想録」によれば、慶喜がその間の事情を次のように語っています。「大坂城内の騒擾さわうに困惑した老中首座の板倉伊賀守勝静かつしずかが、風邪で横臥中の予に将士の激昂凄まじく帯兵上京無しには済まされないと執拗しやくごうに説くので、予は読みさしの孫子を示して『彼を知り己おのれを知らば百戦殆あやうからず』とあり、一体我が家には西郷吉之助・大久保一蔵・吉井友実等ともむねに匹敵する人物がありやと問うと、否と言う。『この如き有様では戦うとも必勝期し難き上に、遂には朝敵の汚名こうむを蒙るのみなれば決して我が方より戦いくを挑む勿れ』と論したが、板倉や永井玄蕃頭尚志等げんぱのかみなおゆきは『慶喜公が出陣を許し給わずば公を刺して脱走しかねまじき勢いなり』と言う始末で彼等を制馭せいごできなかった」と慶喜は嘆げくのみでした。

## 二、鳥羽伏見の戦い

結局老中を中心に作戦を練ったのでしよいか、総督・大河内正質、副総督・塚原昌義を任命し、陸軍奉行・竹中丹後守重固の総指揮の下にさしたる戦術も無しに、道中抵抗も無く押し通れると高を括つて、『討薩の表』を掲げた滝川播磨守が先導して一月三日に鳥羽街道を進軍しました。一方、薩摩・長州軍は、旧幕府軍を京に入れたら政治的にも戦術的にも敗北と見切つて、鳥羽・伏見の街道途中で絶対阻止の決意で布陣していました。滝川播磨守は薩摩軍と接触するや延々と入京の談判を始めた挙句の果てに薩摩軍に発砲されて驚いて逃げ出す体たらくでした。滝川に後続した歩兵銃隊は弾込めせずに四列縦隊のまま戦闘に入ってしまった為に、三方から狙い撃ちされて逃げ惑う失態を演じました。その翌日の四日は旧幕府軍が新手を繰出して富の森陣地を奪回し、更に追撃に移ろうとした前線部隊を、後方で指揮する竹中丹後守が「兵を収めよ」と指令して攻勢の絶好の機会を逃したのでした。その後旧幕府軍はじりじりと後退し、六日に至り橋本に台場を構築して激しく抵抗しました。流石に薩摩・長州軍も攻めあぐみましたが、突然に淀川対岸の山崎関門を守備する津藩藤堂軍が裏切つて橋本陣地に砲弾を撃込み始めました。薩摩・長州軍も勢いに乗つて側方や後方に廻つて総攻撃を掛けました。旧幕府軍は堪らず大坂城へと一斉退去し、その夜半過ぎに慶喜は大坂城を抜けて、江戸に帰還しました。旧幕府軍の軍力は薩長軍に比べて人数三倍、銃砲数は五角でありながら敗北した原因は、

<sup>3</sup>「会津戊辰戦史」によれば

① 将帥の竹中丹後守は、その任に非ずして、命令の統一を欠いて各部隊は思い思いの行動をとり、難局に遭遇すれば命を承けずして逃散する者甚だ多し。

② 戦術の拙劣さ…京坂の間ただ一条の隘路より大兵を進めたので、混雑を来して命令が行渡らず、我軍の大兵は烏合の衆と化してしまった。もし兵を割き一は、鳥羽と伏見街道を、二は、龜山を経て丹波口より京都に入り、三は、高槻街道より西国街道に出でて東寺に向えば藤堂家の離反の隙を与えず、四は、京の東方、蹴上方面から京都に入らしめれば寡少な薩長軍を一層細分割させることになり、我軍の混雑も防げたであろう。又、京都の兵数は数千と称したれども戦意あるは薩長の兵のみで寡少であるから、我軍を分割しても支障は無かつたであろう。

③ 無計画な戦い…我軍は京都の情勢に暗く、薩長軍の戦意も知らずに戦わずして入京可能と思込み、思い掛けずに開戦になり、狼狽して酷い負け戦になってしまった。

## 三、慶喜の行動の背景

新政府議定への返り咲きが目前に迫つた折、家康再来と称された程の慶喜が、薩摩討伐を強要する臣下を統御出来なかつたのは、京都では公家や武家藩主相手の政治折衝に於いて頭脳明晰・言語明瞭・音頭朗々とした辯舌経験のみで、家康の如く生死を分つ修羅場での部下の統率の経験が無く、激変した状況下で臣下を統制できませんでした。惜しむらくは肉体的勇氣に欠けて、「主君を手に掛けても討薩する」と息巻く主戦派家臣や、慶喜追討を叫んで迫る官軍といった眼前の強力には屈服し易い性格でした。この時、慶喜の脳裏に浮かんだ事を推察すれば 第一に父・斉昭の言葉、第二に周囲の政治的情勢、第三に会津藩の不戦恭順派・神保修理の進言、第四に勝てば官軍の意識、第五に慶喜が自ら

命じた軍制改革の遅れだったのでしよう。第一の斉昭の言葉とは<sup>4</sup> 『我等は三家・三卿の一として、幕府を輔翼すべきは今さら言うにも及ばざる事ながら、一朝事起こりて朝廷と幕府と弓矢に及ばるるが如き事あらんか、我等は例え幕府には反くとも、朝廷に向いて弓引く事あるべからず。これ光圀公以来の家訓なり。ゆめゆめ忘るることなかれ。』 第二の周囲の政治的情勢とは、公議政体派の徳川慶勝、松平春嶽、浅野茂勲、山内容堂は討幕派の島津茂久と共に小御所会議の議定として朝廷に参加して、その身柄は拘束されていますから旧幕府軍と戦いになれば中立か朝廷側に付くしかありません。現に当初は、薩摩藩・長州藩以外の藩は中立でした。第三の会津藩の不戦恭順派・神保修理の進言とは、一二月九日の王政復古に際して神保修理は、事態が收拾困難になると朝廷側と開戦に迫込まれるので、ひとまず江戸に戻って善後策を練るべしと不戦恭順論を慶喜に進言しましたが、この時点では未だ公議政体派の巻返しを期待して慶喜は取敢えず二条城から大坂城に移りました。この場合には神保修理の進言通りに江戸に戻って「慶応の軍制改革」をじっくりと進める一方で、公議政体派の山内容堂等と連絡を取りながら新政府と交渉すれば、小御所会議の倒幕派は僅かに薩摩一藩のみでしたから、薩摩藩は発言を封じられ且つ武力でも軍制改革が進んだ旧幕府軍に圧倒されて、日本の近代政権は明治政権とは全く異なったものになったでしょう。因に慶喜の唐突な大坂退去は、神保修理の進言に従ったものと誤解されて神保は会津藩の抗戦派によって詰め腹を切られました。第四の勝てば官軍の意識とは、朝廷側の薩摩・長州藩の戦力はせいぜい四、五千名で、対する旧幕府軍は大阪城内には一万五千名が駐屯していたのでしたから、板倉等の重臣に対する応答で大兵上京を阻止せず「勝手にせい」では、まさか敗退するとは思わず勝てば官軍といった意識があったのでしよう。第五の慶応の軍制改革の遅れとは、第二次長州戦後に全旗本に家臣供出を命じて全員銃卒とする「御旗本軍役令」を発しましたが、当時の旗本家臣の実態は農民や浮浪・乱雑な新規召抱え兵等であり、これ等で員数を揃えても烏合の衆で実戦に役立たないので、「御旗本軍役令」に代えて「半知上納の金納令」を慶応三年九月二十六日に布告しました。即ち今後十年間、知行高を半分召上げてその資金で幕府が直接徴募する方式に切替えました。確かにこの布告通りに実施すれば総計一万六千名の最新式銃装備付歩兵銃隊が完成し、諸藩を圧倒して徳川家主体の新制日本が誕生したでしょう。然るに軍役令の発令から金納令に変更する迄に丸一年も費やした為に金納令が発令されたその翌月十四日には慶喜は大政奉還を上奏していたのでした。この軍制改革に際しフランス軍事顧問団が取敢えず江戸在住の博徒、やくざ、雲助、馬丁、火消等の無頼漢を集めて一年間手塩に掛けてかけてフランス式訓練を施した伝習隊は強力でした。鳥羽伏見戦では最新鋭の元込式シャスポー銃を装備した約八〇〇名が参加し善戦するも少人数の為に退勢を挽回出来ませんでした。

#### 四、江戸帰還後の行動

江戸帰還後の慶喜は静寛院宮に朝廷工作を依頼したのみで何等手を打つこと無く、江戸城内は連日血相を変えた人々が喧々囂々の大争論を広げていました。<sup>5</sup> 松平春嶽は後日風聞を耳にして、その

著書「逸事史補」で慶喜評を残しています。曰く「慶喜公は才智勝れ給いて実に感佩する人なれども、至りて肝の小なる性質なり。それ故決断する事ならず、水戸烈侯（斉昭）も右同断にして、父の性質

を受けたるものと存ぜられ候。・中略・旗本等の喋々議論に眩惑せられ当惑ここに極まり『今この城を渡せば都下の人民無事安穩なれど、東照宮以来代々所有の城を渡せば先祖代々の尊慮も如何。不幸の罪遁れ難し』とて実に喫食もせずして心配。勝安房守召され候いて御相談のところ勝も容易ならぬ一大事の事ゆえ勘考して申上ぐべしと帰宅せり。」ようやく慶喜は一月一五日に主戦派の陸軍奉行並の小栗上野介忠順を罷免して、和平派の勝海舟を海軍奉行並に登用し更に一月二三日には陸軍総裁とした勝海舟から和戦両策を提案されて、ようやく不戦を決断して二月一日に東叡山寛永寺に蟄居したのでした。

### おわり

王政復古直後に、神保修理の進言を容れて大坂ではなく江戸に退去していれば新日本の政体は全く異なった様相を呈して、徳川家主導の立憲新政府が誕生した可能性があります。慶喜の「揺れに揺れた不決断」「勤皇の意識」「江戸ではなく大坂に籠ったこと」「勝てば官軍の意識」等々の諸要因が明治維新をもたらしたものと推察します。歴史に「IF」を許して頂ければ、「徳川家主導の立憲新政府成立」の場合は強固な士族が薩摩・長州・佐賀各藩のみならず全国諸藩にも残って、明治時代の佐賀の乱や西南戦争より遙かに大規模な内乱が発生するか、或は旧ロシア帝国や旧ドイツ帝国のように武士貴族階級主導の好戦的強国に変身して世界的大騒乱の末に滅亡する可能性があります、やはり家康型慶喜よりも、有りの儘の慶喜の方が無難だったのでしよう。

出典… 「日本の歴史 20 明治維新」 井上清著 中央公論社

「昔夢会筆記 徳川慶喜公回想録」 渋沢栄一編 東洋文庫76 平凡社

「鳥羽伏見の戦」 野口武彦著 中公新書

「民権と憲法」 牧原憲夫著 岩波新書

「幕府歩兵隊」 野口武彦著 中公新書

脚注… 1 井上清 四〇～四二頁

2 渋沢栄一 二〇頁

3 野口武彦 三〇一～三〇二頁

4 渋沢栄一 四頁

5 野口武彦 三〇八～三〇九頁

補足説明…高校・日本史教科書の小御所会議並に鳥羽伏見戦に関する記述

高校・日本史教科書B（原始・古代～近代・現代）平成一九年度（二〇〇七年）発行

（山川出版社）…小御所会議で辞官納地の処分が決定されると反発した慶喜は大坂城に引揚げた。

旧幕府側は一八六八年一月大坂城から京都に進撃したが、鳥羽伏見戦で新政府軍に敗れ慶喜は江戸に逃れた。勝海舟と西郷隆盛の交渉により江戸城は無血開城された。

（実教出版）…小御所会議で辞官納地の処分を決めた。一八六八年一月旧幕府側は兵士を京都に進撃させたが鳥羽伏見戦で薩長軍に敗れた。新政府軍は征討軍を江戸に向け四月江戸を開城した。

（清水書院）…小御所会議で辞官納地を決めた。この決定に不満をもった旧幕府側は一八六八年一月京都郊外の鳥羽伏見で新政府軍と衝突し、敗れた。大坂城にいた慶喜は江戸に逃れた。江戸に迫った新政府軍は江戸城を戦わずに開城した。

（桐原書店）…小御所会議で辞官納地を決めた。旧幕府勢力は尚温存されており、薩摩・長州藩を中心とする倒幕勢力は旧幕府勢力を一掃しよう画策した。旧幕府や会津・桑名藩等は一八六八年一月鳥羽伏見で薩長を中心とする新政府軍と戦ったが破れた。新政府軍は江戸に進撃し勝海舟と西郷隆盛の交渉で四月江戸城を無血開城した。

捕捉説明…鳥羽伏見戦争の人数・装備は、銃装備の性能・数量は互角で、人数は旧幕府軍が絶対多数

旧幕府軍…戦闘に参加 約一万人（旧幕府歩兵隊 五七〇〇人、伝習隊第一大隊八〇〇人、

会津藩、桑名藩 ・高松藩・大垣藩・伊予藩・松山藩等 約四〇〇〇人）

装備小銃 伝習隊のみシヤスポー銃、他の幕府歩兵隊はミニエー銃、会津藩等は刀槍と旧式銃数百丁、大砲は旧幕府歩兵隊が一八門装備、大坂城内には尚、約五千人が控えていた。

朝廷軍…合計 五千人

薩摩藩軍 小銃兵一六〇〇人、砲兵三〇〇人、斥候兵・小荷駄兵一〇〇〇人 合計約三〇〇〇人

装備小銃 ミニエー銃エンフィールド銃 四斤山砲一六門、六ポンド砲一門、携帯臼砲一門

長州藩軍 小銃兵 五四〇人、斥候兵・小荷駄兵一一四人、その他 四〇〇人 合計 千余人

装備小銃 エンフィールド銃

土佐藩軍 小銃兵一〇〇〇人、砲兵二〇〇人 装備小銃 ミニエー銃

捕捉説明…「鉄砲の種類の説明」

ゲベル銃…弾丸の装填は前装式（先込め式）で、銃身の内側を滑らかにした滑腔式、命中率は、

九一m（一〇〇ヤード）七四・五％、三六五m（四〇〇ヤード）で四・五％、幕府では士分以下の従卒に貸与された。

ミニエー銃…フランスで開発された前装式（先込め式）で、螺旋状の溝を銃身の内側面に彫った旋条

（ライフル）式、命中精度はミニエー銃の方がゲベル銃よりはるかに優れていた。命中率は、九一m（一〇〇ヤード）九四・五％、三六五m（四〇〇ヤード）で五二・五％、幕府では士分の軽歩兵に優先して、貸与された。

エンフィールド銃（エンピール銃ともいう。）…イギリスのエンフィールド造兵廠で開発されたミニエー銃の一種で、弾丸の形状が若干ミニエー銃と違っていた。グラバー商会が多数売込んだ。スナイドル銃…イギリス軍がエンフィールド銃を後装式（元込め式）に改造した銃で、

改造エンピール銃ともいう。戊辰戦争後期に薩摩・長州軍が主力装備とした。

シヤスポー銃…後装式（元込め式）の最新鋭銃でしたが紙製薬莢の為に、使用上限界があった。

先込め式ミニエー銃の一発当りの発射間隔は三〇秒に対して、元込式シヤスポー銃の発射間隔は七秒の為に、約四倍の射撃力があつた。後年金属製薬莢を使用するグラーズ銃に改造され、これを国産化したのが日本初の国産小銃の一三年式村田銃となつた。

#### 捕捉説明…江戸幕府と薩摩・長州藩の銃装備

江戸幕府の文久の軍制改革（一八六二年）以降では当初ゲベル銃から次第にミニエー銃を装備。ナポレオン三世は第一五代将軍・徳川慶喜との関係を強めて、慶応二年（一八六六年）に幕府にシヤスポー銃二千挺贈呈し、慶応三年設立の伝習隊で五〇〇挺保有した。シヤスポー銃の贈呈と共に対日軍事顧問団派遣を決定し、シャルル・シャノワール参謀大尉を隊長としジュール・ブリュネ陸軍砲兵大尉副隊長とする、士官六名、下士官一三名の総勢一九名が、慶応三年（一八六七年）一月に横浜に到着し、幕府伝習隊を同年一月迄訓練した。その伝習隊は江戸在住の博徒、やくざ、雲助、馬丁、火消等の無頼の徒を徴募し二個大隊約千四百名の兵卒隊でフランス軍事顧問団が一年間手塩にかけてフランス式訓練を施した。薩摩藩は、ミニエー銃・エンフィールド銃が主体の全員銃隊編成。長州藩は、元治元年（一八六四年）八月坂本竜馬の斡旋で、薩摩藩名義で長州藩がグラバー商会からミニエー銃四三〇〇挺、ゲベル銃三〇〇〇挺を購入し、慶応三年二月には更にエンフィールド銃三〇〇〇挺を購入し、奇兵隊や旧来の足軽隊も全員、銃隊に編成された。

#### 捕捉説明…「慶応の軍制改革」

第二回長州征伐に敗北した直後に、急遽慶喜は幕府に反抗する諸勢力を剛力で抑圧できる軍事力を構築しようと決意しました。慶応二年（一八六六年）八月二十六日には「御旗本御軍役の儀は、すべて銃卒の員数をもって定める」軍役令を発令しました。既に薩摩藩や長州藩で実施している「全軍銃隊令」である。この「慶応の軍制改革」の資金の出所はフランスと交わされた借款契約でした。仮に慶喜が鳥羽伏見後にも徳川家存続理由で朝廷との戦争に踏切つたとすれば、フランス借款は膨大な額に達して、清国のように租借潰けになり、明治時代の近代化へ脱皮は不可能であつたらう。「慶応の軍制改革」での旗本の義務は歩兵役務提供であり、軍装備一式は幕府財政負担でした。

第二回長州征伐の折、フランス公使レオン・ロッシュは幕府に長州を撃破する戦力が無いとみて、下関で長州藩当局に降伏を勧めるが拒絶された。その後江戸にて老中と会見し、①長州と和解するか又は②軍備を増強して長州を屈伏させるか、の選択を迫った。慶喜は後者を選択し、ロッシュが斡旋したフランス経済使節団と幕府は九月一二日に借款・武器契約を締結した。総額六〇〇万ドルで、陸軍の装備改良費・軍艦購入費・横須賀製鉄所経費に充てられた。この旗本による軍役差出しを実施するや、判明したことは当時の旗本の家臣そのものが浮浪・乱雑な新規召抱えや農兵等であ

り、これ等で員数を揃えても、各隊がばらばらで收拾が付かない鳥合の衆で実戦に役立たないので、御旗本御軍役に代えて、**軍役をすべて金納に一本化し、兵卒は幕府がその資金で直接徴募すべし**と陸軍奉行や勘定奉行等が建議した。これを受けて慶応三年（一八六七年）九月二十六日に半知上納の**金納令**が布告された。「今後は歩兵は全員、幕府が直接新規雇用するので、兵賦差出（人納）は廃止し、すべて金納とし、そのため今後十年間、知行高を半分召上げる」確かにこの布告通りに実施されれば、総計一万六千人の最新式銃装備付歩兵銃隊が完成し、諸藩を圧倒して徳川家主体の新制日本が誕生していたかもしれない。しかるに先に軍役令が発令されてからこの金納令に変更されるまでに丁度一年を要しており、その間、旗本、御家人、農民、町人等の銃隊化は一応二万四千名の組織編成が出来上がったばかりで、訓練度は未熟で、とうてい薩長軍に対抗可能なものではなかった。即ち、**金納令が発令されたその翌月十四日には將軍慶喜が大政奉還を上奏していたのである**。將軍慶喜は「後一年の猶予があれば薩長軍を圧倒する新生幕府軍が出来たものに」と、江戸帰国途上の船中で想いを馳せていたのであろう。現に丸一年かけて鍛えられた伝習隊は強かった。フランス軍事顧問団は取敢えず江戸在住の博徒、雲助、馬丁、火消等の無頼の徒約一四〇〇名を、一年間手塩にかけてフランス式訓練を施した。この伝習隊の一部約八〇〇名は鳥羽伏見の戦に参加し、譜代諸藩兵に比し善戦するも小勢の為、頽勢を挽回するに至らなかった。その後の戊辰戦争では大鳥圭介、土方歳三の指揮下で北関東、北陸、会津と転戦し、最後に五稜郭で新政府軍に降伏した。

#### 捕捉説明…「江戸幕府の軍制改革」

##### 「安政の軍制改革」

嘉永六年（一八五三年）七月八日ペリー艦隊四隻が浦賀沖に現れ、安政元年年（一八五四年）三月三日老中首座・阿部正弘の下で日米和親条約調印。安政二年（一八五五年）一〇月に佐倉藩主・堀田正睦が老中首座に就任するも、堀田は専ら外交事務に専心し、幕閣運営は依然として阿部正弘が担っていました。阿部は**軍制・軍備**に重点を置いて幕政を改革しました。その大要は、①大船建造の禁を解いて造船業を起す ②オランダに汽船発注し、長崎に艦船伝習所開設③品川・長崎に砲台築造 ④講武所を開設し、洋式銃隊を編成 ⑤大砲射撃場を開設し洋式砲術を習得 ⑥諸藩邸内の練兵と銃砲の江戸へ輸送を許可 ⑦蕃書調所を設立し、蘭語・仏語・英語の習得や兵学書・医学書等の翻訳

##### 「文久の軍制改革」

文久二年（一八六二年）十月老中の安藤信正・久世広周政権は、幕府の親衛常備軍の創設を目指して、軍制改革案を作成し、「陸軍の歩兵・騎兵・砲兵の親衛常備軍として総計一万三六二五人、海軍艦船四十三艘等」を構想しました。「歩兵」は、文久二年（一八六二年）一二月兵賦令（歩兵人員差出し命令）が全旗本知行地に発布され、その徴募歩兵数は六千三八一人で、五ヶ年季交代制とした。

「騎兵・砲兵」は、幕府御家人を採用した。元治元年（一八六四年）七月迄に関東諸国から一万人程徴収されました。訓練された兵士は、天狗党の乱や長州征伐軍に投入され、芸州口の部隊は小勢ながら善戦しました。

軍制改革の概要：オランダ兵制を手本として陸軍を歩兵・騎兵・砲兵の三兵種編成とした。

①歩兵・重歩兵・軽歩兵・親衛狙撃隊従卒

重歩兵は銃剣を武器とする戦列歩兵である。士分以下の兵卒で、全旗本の知行地から供給とし、知行高に応じて五百石は一人、千石は三人、三千石は一〇人という割合で賦課し、五〇〇石以下は金納とした。旗本知行高から総計六千三八一人となる。

軽歩兵は、帯刀銃携帯兵で砲隊・輜重隊等の護衛する「撒兵」である。兵員は、無役（小普請）の士分で、お目見以下五〇俵以下の者で四大隊総計一〇二四人、軽歩兵の別種に、親衛狙撃隊銃卒があり、兵員は、お目見以下の小十人組・宝蔵番・天守番・徒士組番士で、総計八四四人

②騎兵・重騎兵・軽騎兵

重騎兵は騎銃（カービン銃）携帯する。兵員は小普請組のお目見以上五〇俵以上一五〇俵以下の者で、六騎兵大隊総計五七六騎

軽騎兵は短槍を携帯し、重騎兵や騎砲兵の護衛役で、兵員は小普請組のお目見以上一〇〇俵以下の者、二騎兵大隊総計一九二騎

③砲兵・軽野砲隊・重野砲隊

軽野砲隊は六ポンド砲（二・七kg砲弾を発射するカノン砲）、口径一二cm榴弾砲を装備し、砲八門で、兵員は諸組同心で総計三八四人、重野砲隊は、一二ポンド砲（五・四kg砲弾を発射するカノン砲）、口径一五cm榴弾砲を装備し、砲五二門で、兵員は諸組同心で総計五六人

軍制改革の費用：文久三年（一八六三年）の幕府支出分は、陸軍入用 一四万六千両・大砲小銃製造費 十二万両・騎砲兵当番所・歩兵屯所普請費四万八千両、合計 三一万四千両